共三十本

成形圖說

五穀部

十五

特別
二 1
144
14

門加 1
號 144
卷 15/14

成形圖說卷之十五

目錄

稻 附穗稃
穎芒
稈秸
嘉禾

成形圖說卷之十五

五穀部 稻類

凡穀の類甚夥しかれども天下稻穀をもつぱら人民を育ふ乃第一とする所なり　皇國乃歸する貢ぎ奉らんく天皇は御名にしを稻穂の事と称奉りは斯瑞穂国と統御うしまく申なりもつぱら古事記傳曰神津代乃御名に豊香節豊買葉木國あるいは皆稻よりまして御名なるべし香節ハ稻の靡き垂さまは意豊買ハ豊穎なる葉木國はハびこりもつぱらなる意雲野ふとぶとしの久美竹乃久美なる稻乃ふさやうなるを又嚴稻稻飯御食主なと

の御名乃例をを言ひのべしけふハ法ハ理をあるぬ至し
謹按ふ　懿德乃御諱を紹友とやし　孝照の御諱を香
殖稲とやせし蓋亦　天忍穂耳　天津彦穂ふとやなぶ
ふ相ひとしを斯瑞穂国を統御ふる稲穂乃縁ふしを取
るをひ天の下乃君ふ立ふは生民乃為なれハ之を食
ふの物を御名のうへふ冠ふいみしくお
ほきなるかくふ小子穀ふしなまはいふしへふ稲種
五品ふど見えしを稲を主ういるや見ふ麥豆粟
稗抔加へて五穀とし古事記ふは稲粟小豆麥大豆とし
延喜式ふハ五穀訓て田成物といへを九穀乃名ハ皇極

紀ふ見えしるを始なふを洛ふてハ五穀乃名古今
立に異同ひを禮月令ふ黍稷麻麥豆と五穀やして稲と
をるハ其地のはをとをふる周書云神農之時天雨
粟是則初有五穀之始也宋應星ら天工開物ふ五穀ハ麻
菽麥稷黍獨遺稻者以著書聖賢起自西北也〻辨せしハ
はるかなるを我　邦ふてハ西北をを稲生をふ
地をなしをろうハ其初水田少らゆ為ふ禹本紀ふ
令益予衆庶稻可種卑濕昆陽漫録白酷土乃いふしへハ
しうう後世ふ田大ふ開水田少く岡穂多ふうて米宜
ふをやを今ハ粳宜しうしに頃異国の米とみるふ岡穂な
ひを我　邦上古ふを田とを為ふ異国の米の宜敷き萬國ふ
勝るを為ふハ我　邦と水穂国をを稱をるつ

今姑く諸書を鈔録して参閲す便りて鄭玄月令
註より五穀ハ黍稷稻麥菽周禮注作黍稷菽麥稻穀梁傳より禾麻粟麥
豆素問真言論より麥黍稷稻豆趙註孟子朱熹註是より採もる藏氣法時論
より麻麥稷黍豆五常政大論より麻稷麥稻豆王逆離騷註亦おなし靈
樞五味篇より麻麥秫米黄黍大豆周書より凡禾麥居東方黍
居南方稻居中央粟居西方菽居北方太平御覽范子計然
を引て五穀者東方多麥西方多麻北方多菽中央多禾以
上の書を所小異大同蓋必ず根據ありて次
東方より麥多りかゝる其方位より泥て其実ありて
次夏官職方氏云正東曰青州其穀宜稻麥今和蘭人我東

方の稻米を天下第一とする産物と交易するもの絶
ず蓋麥ハ北方乃地より生じ次歐羅巴地方麥なくして常食と
して又三穀四種六穀七穀八穀九穀乃名負ひて格物論云三穀者粟
稻菽是也四種者黍稷稻麥五穀者麻黍稷麥菽六穀者黍
稷粱麥菽稌是なり今按より三穀六穀ハ是周禮とおなし
而三穀四種より稍ありて五穀六穀より稍ゝ異なり恐ハ
くハ亦失せるなるべし七穀者通雅より黍稷稻粱二麥菽又
八穀者星經より黍稷稻粱麻菽麥烏麻九穀者周禮より黍稷
秫稻麻大小豆大小麥一說より九穀無秫大麥而有粱菰酒
陽雜俎より八黍稷稻粱三豆二麥と見えたり恐ハ皆後人の說より出るなるべし羅存齋の爾
雅翼云古人說百穀以爲粱者黍稷之總名稻者概種之總
名菽者衆豆之總名三穀各二十種爲六十蔬菓之屬助穀
各二十種凡爲百穀然予以爲穀之種類毎物不下十數亦

何假蔬果而後為百耶按ふ書舜典註ふ穀非一種故曰百穀此説得うるとく延喜祝詞式ふ作物うるふハ田野の百穀とぞいふと谷川氏いつり○正安大嘗會遠江國池田里兼仲五くさのほうしを埜なかの田戔住物いの事

南朝紀傳嘉吉三年癸亥三月二日雨五穀

伊禰古事記○即稲也

伊奈志禰以上書紀○並ふ伊禰と通音

秋穂按ふ古事記ふ水穂と

ひし稲ハ水田ふせるうるを稲穂ふ係ていて又秋成の第一なれハいへ

水陰艸以上万葉集天の秋風ふ靡くとぞ詠ハ未ぬらし○藏玉集ぞく

拙し吾田乃面ふ秋付てあらけ菜を刈ふ

富艸神樂歌○人麿家集にそよりハそよの小田より純
ぬまてとこくさの早苗採川originらあり○枕草紙君
うちの歌よりてとこくさの早苗とうゑひさ
る○大鏡よりこの花ふに採入て宮へまゐらんとて
と例のみなもりうるやうに業りなるし　後柏原帝の
大佛歌今よりの秋を惑つゝ民の戸をとゝ業れる苗哉
そ源　田實艸匠材集○古今集千里歌より後まきのおく
しき　ふる苗ふれと空ふけふゝをゆめ
実とゝそ夢○真風歌よいさやきゝ小田乃とろミを刈よ稲
行むゆふ乃風に志うゑ志ゆ　秘蔵抄よとろミ付稲
の東語ゆりそ抜よとろミ　秋待艸蔵玉集ゆりけて秋に
と田の実と音ゆ　秋待艸まち艸の枕ゆくに
家と見ゆりハとしゆふくるゝと○莫傳抄よ　日景艸莫傳
ハよふくにゆるハ麦ゆ又ハゆるゝ
抄種まきて秋やまつゝ天の川ゆけの苗乃ゆれ
うめ乃に注よ天川乃苗代を抜よ是大むりし天
安河原よある狭長田の稲と搗るゆゝ　し天河の苗代
とせしハいりゝ　ゆふつき早苗とゝそ又新古
今集よ苗さゝ　ゆゝ乃里ゆひけ苗豊乃明乃かさし
る〳〵し　乃日の里ハ大嘗會ゆを読ゆし　ハ是を稲ゆめ

稲別録○稲艸ゆ　毛詩註稲即
今南方所食稲米　水生而色白者也
江米本艸　水稲齊民
原始　要術

嘉蔬禮記宗廟
之禮所稱

蕃名レイスト

伊福とは飯根ゆり命と續乃根ゆして甚嘉禾ゆゝ稲
ていふゝと須とさゝれと凡伊ゆゝ息命ゆゝ皆生生の德
ある須して根ハ物のゆゝ人の名ゆ嘉てい
いりゝ天皇の御名よ日本根ゆと稲ゆ　ハいゆゝの
常して又是父根の母てゆ辭乃葉よゆくゝゝゝ父は
吾乃れ根ゆして母いゝんゝゝは父ゆもかゆてゆ
ハ古人乃學ゆり　因言櫻乃葉集よ是千種乃祖ゆも書ゆり

はおほとは父母はいふまでもなく祖先をもかくいひけ
ふ世の事を御祖命とやせしは古事記にみあらはれ
む桙離の路を父根と呼びしにおくれ大
切なれハ道ハおやといふてもかくはやうなハ
なりぬ古の律ハ母根なるとハ不孝ハ父嚴重にして犯しかたき
ものなる又犯せる者罪なきハ父嚴重にして犯しかたき
ゆゑなり一説ハ道土根なり配慰懶根のかく根てふハ義
二神より人祀ゆゑとて伊祢ハ尊めるなるべしとうり
詞なるとして伊祢ハ尊めるなるべしとうり
もてもこれとのハ地球の第一百穀の長上なる始穀の實
をのとなりて稲おなしつく稲ら長の日長くして
めの苗代小田りせる為る綿の實みのくし仲月紀さく
須賀ハとやアとて梅毛ふるとよ唐鍬田子のあしまして田笠
なりしの少男女ら神ハ濡といとなぬハ生芽成田歌

おれよかやのとうとうしつまとうる若苗や君ら為万の数
とつませてと新よいつら抜とふハ秋のみのり成ま
つもの苗も水高き水月あはてる日地蔭さへかくまで
きよ外とさ保汗と城ハいあつめ向股かくて溝沼の程
のもりろ田ろつりみて草引殘ういとあるハ苗移
ア人の苦とかあし泥と宜まるしし又時しいはは門田
の畦汗ってらみちい好なるめ番殖稲の花実をあてと
るよ稔うるめらき若姉子ら裾吹かへて秋風よ涼
しく穉穂おとろはは茅形の葉よ覆ふ色
しものゆふ霜結ハ雪の白ハは天地望かと結る稲

負鳥毒をもくちろ子母はうみくゝ神主ぬの色をかうめる
八月より後さてのもとおくての稲おとの葉をもゆ氏
穂のうゝき業とは盤をぬうとも結まて八握穂を熊
いたゞきていとゝ速くゝ又深し人間之をるていはせき之と
るをれハせられをもうゝ紀おゝ知りゝ又し我　天
朝霜月中の卯日新稲と三百餘座乃神祇を集ゝ豆是
ゝん神代より　日神乃始ゝ豆ゝ祭禮典まて而謂新嘗
會是也き合義解曰新嘗謂嘗新穀以祭神祇也朝則諸神
之相嘗祭夕則供新穀於至尊也堀川殿百首歌ゝ豆神
の食薦とうちもくてゝ知りゝ之又

大嘗會ゝは天皇天日嗣とゝろしめその後悠紀主基
の國郡御田を預トゝ定ゝ其齋郡を齋院てゝ所を撰
ゝれ御稲抜穂の御使して稲穂を取ゝふその御田とゝ
大田と称ゝその穂をゝ撰子稲ゝ称ゝ是と悠紀主基の
両の新宮ゝ致ゝて天皇御親新宮ゝ入御て　皇祖神
祇と祭ゝせゝ御みけゝを聞食ゝ王臣百官奉行
ゝ関ゝ代並ゝ齋服を着て各其事ゝ役ゝ畢て天皇豊
樂院ゝ御て致齋とゝ中ゝ酒及御物賜ゝ中ゝ大嘗の直會の豊樂とゝ中其
詳ゝ大嘗會式具釋ゝ

而古ハ悠紀殿を出御して和舞を奏で主基殿を出御して田舞を奏もうせゝ申載らしめ此田舞の歌曲今は傳らざるもしと其儀ハ多治比氏の内舎人等と舞人ゝして十人ゝ有り負観の比ハ先田舞を奏し次ゝ雅樂寮の樂を奏せりとあり此ゝ因て考れば田舞てゝ名も年穀を祭らせもゝ大禮ゝ有れば必田農ゝ縁故ゝる舞樂ゝぞ有りけれ古事記傳曰古今集に御代〳〵のゝはじめ毎歌ゝ新稲をゝて饗するゝゝ名あゝ饗ハ誰が家もするわざなれど別て　朝家ゝもゝと大嘗とやゝぞうし後世ゝ践祚大嘗ゝと大嘗こゝ毎年のゝと新嘗と

いゝ是全く　皇國の故実ゝて太古の禮典みてぞあるゝ甚もかしこき事ぞ　天智乃政執ゝ叶ふ万の事改新とたゝきゝ漢國ゝを好しゝ万のゝ皇國上代ゝ封建の制を停て郡縣て格ゝ変ゝ出来ゝかの天地いゝ志がやゝて壬申のいくさゝ不絶改常典と嚴ゝ詔ゝ新政を立しゝ時の事ゝ神代ゝ都ゝ定し國體を変改ゝ王臣百官人天下の百姓すべて容易信服せゝ又ハ後ゝ旧ゝ復せゝ思してかく仰せゝ夫ゝ天平の末ゝ大新嘗の肆宴ゝ佛尼をゝ忌ゝ氏の仕ゝ大海ゝ到来し果ハ道鏡ゝて奴婢ゝ内場ゝ入て紙糠の心を挽ふしゝて幾許の忠直等を讒戮ゝて殆ど天位を危ふしゝ方ゝ出来ゝ有ゝ僅ゝ五百年ゝ有りゝ後ゝ顛倒せゝて保元平治乃比ゝ天下諸國のゝさゝ又旧ゝ復せゝて常典とゝの皇神のゝハゝの残りて又上代の躰ゝ化ゝ御心をゝ知ゝ奉しと鈴屋の翁の詔詞解ゝ論しゝ奉かしこゝ有ゝぞ　天智の異邦の風を移

[illegible]過得[illegible]で[illegible]や中臣の君とものし秋田の
[illegible]と考へ[illegible]と[illegible]と[illegible]古[illegible]あびよんけうざはいうふ
も而悠紀らは齋忌うて主基も濯とあひ並よ新見川
ふて御禊被ものし官司を川上よ陰し潔齋し致齋散斎
の儀式あるとをていふかくて大嘗會行ふ中ハ京よ
ハ僧尼の住来も禁られ梵刹の鐘鼓を撞ものとも止ら
ほ延喜大嘗式曰令所司ト定悠紀主基國郡又ト定田及
齋場雜色人等凡出御前行の猿女御巫中臣齋部佐伯伴
造大臣公卿各其職掌ハ夫木集大嘗會を詠ふ
天が代は安乃郡の貢もの斎場の稲穂搗そ初多せむ
しは稲穂の國郡數所の中ヨリトハ定もひ[illegible]ども中

須よ悠紀ハ近江國主基ハ丹波備中の両國ものぐ[illegible]用
らは當廻成乃刈天子廻立殿よ御ーるよ是君ま立ものよ
ハ萬蒼生の為ものは新稲既よ熟して之ハ神祇よ祭ま
ものとして年穀の恩澤と敷の億兆乃撫育と施ーるよと
ものを拾き集 伏思天皇の大御歌神やしれ世の為し
てを所とをおとをおのみふりて世をハ祈るをされハ
年中の祭祀よ孟春正月祈年祭をして百[illegible]ーしやうを御
即位の後幣帛を諸神よ奉らは祝詞ーと食國天下之政
依所聞食ものとあると食國とは世心と着ーる
稲穂古事記○永仁大嘗會中納言俊光ものきの千五
百乃秋のものとめは田中ハ稲のわさ穂ものとつむ

荒稲延喜祝詞式

穂音遂古文作遂説文禾成秀也詩傳穂秀也

禾廣雅粱穂其穂謂之禾

蕃名

書紀ヨ穂の一字ヲ伊奈保ト訓ハリ續紀ヨ赤丹穂ト
ツヽヲ熟稲ヲトノヽメ添いヽ川めふゲたと渚稲な
ヨるヲ丹穂ヽいるハ今の俗ヨ穂の赤ヽらヽい
ふまるヲ稲ヨかヽもう赤穂ヽ云地名ヲ見ヨりもち
書紀註ヨ穂訓保火之謂也草木砂石自含火也又曰草木
の萌出穂ヨ出初る花の蕚の紅なる是皆火精の著ル所
ヲ見るヘし　又曰萌與燃同訓義花將開俗謂火登毛須掛
ヨ蕚ハ津火見也神武紀ヨ秀真ヲ保道麻ヽ
刈られハ秀亦保ヽいふ　茅穂ヨハ最ヽ
保ヽいふ　相撲の最ヨハ今言関取ヽ　書紀ヨ　天照

大神勅曰以吾高天原所御齋庭之穂亦當御於吾兒ヽ其
穂ハ即稲穂ヽて人民生育の大本ヽ揚て皇天受授の詔
勅ヽ日嗣の皇孫ヨ誥ヨふ謹て其御本意ヽ地ヽ
夫五の穀豊ヽるヽきハ衣ヽたらヽいぬ無し食ヽの足
しきものハ必衣ヽ為ヽる例ヽ是ヽヽ書紀の
実ハ衣食ヽ行ヽもヽいふヽヽかヽ理ヽ禮月令云孟
春天子乃以元日祈穀於上帝孟秋農乃登穀天子嘗新先
薦寢廟大戴禮嘗新於皇祖皇考左傳云夫郊祀后稷以祈
耕ヽ農事故啟蟄而郊郊而後
又曲禮云歳凶年穀不登君膳不祭肺馬不食穀馳道
不除祭事不縣太夫不食粱士飲酒不樂云々　王制云五穀
不熟不鬻於

市穀梁傳云一穀不升曰歉二穀不升曰饑三穀不升曰饉
四穀不升曰荒五穀不升曰大侵大侵則君食不兼味臺榭
不塗廷道不除百官布而不制鬼神禱而不祠五穀皆熟為有年
きこのすてを神まて　皇國の稲ちと貴き事やけある
我人ハこゝとよの稲穂て常のこゝちるかよんの時うぎ
はるこゝとあれ吾　邦まて稲と五穀の長上こゝてうの
恭穆ちれこゝ次ちの稲種地ちて神と崇ちうけを先まれ
薦ちあれハ是ちまきてめてたきちゝ事し武蔵風土記多
麿郡大止麻智乃天神圭田六十束六毛田所祭大已貴神
也　安閑天皇乙卯年始奠宮社花時以花祭之新稲之時
以新稲祭之こゝの是ちる天皇の大廟ち
らてと稲ちて嘗ちの式あるなり
書紀ち新稲と初穂ち訓ちう初穂ちハ新稲と神ち享ま

先ち薦ちこゝ先古人ち厚のんふして報本の礼ち出
ちう延喜祈年祭祝詞ち荷前者皇太神能大前尓如横山
打積置氏残乎波平聞看為ち東人の荷ちよのちこの荷
緒ち絲ち荷向筵ハ坂東の国くより初穂のこゝぎ物と
筵ち敷ち為ち却ち上ちこゝ荷茅と初穂とこゝハ
ちうが倭姫世紀ち先稲と懸奠ち奉ちこと祝詞ち懸税
ちとこ又えしハ稲穂ちこゝ書行ち無て神ち奉ちとこゝ
今ハ神宮ち其式ちうこゝ山城風土記久世郡穂掛
神社二座こゝあり駿河風土記ちハ早稲熟時以穂並抜祭
之のち又えし西州の俗ハ稲の初穂ちこゝ霧島宮ち献る

と毎歳の例式となる蓋皇孫稲穂を撒るの故実なり百葉は吾妹子らがもちつくる秋の田乃初穂乃かつ〳〵尺れとなりぬるも年中行事歌合は新嘗のあやきのふ乃初穂納おきてなる神酒なる雲の上人三代実録新鋳の銭早穂二十文宣胤記は永正十六年正月十一日下御霊巫女供米持来遣初穂物下學集は最華取一切草木最初之花献神故云言塵集は早米なる人名なり今俗早米をのゝ呼つる古言様は稲の外の物をはつほとゝあハ結なるとなる人えゝ魚ふハ初尾なと書なり凡食物の類なる銭貨花なる新なる賜物或ハ始は得

物ハ祖先は生存の奮迹なるゆゑ和漢共なるいふゝハ食なる時は必ず仮粒を祭る事中古まで膳の一方は祭の仮粒なを置なるが習はわき塩を置なるなり浮屠は食なる祭の俗を存なるいいなるを諸語なを蔬食菜羹必祭るなるは元えなる又梅は武烈紀は影媛は鮪臣の戮なるを悼て行て弔ひなる時の歌は此玉筥みは仮さへ盛玉盤みは名きを蓋注なるばなるゆくなるあり是今なを喪礼の時霊前は仮と奠る水なを供なる縁みゝなるて名なは水初穂といふハ皆太古乃風儀なるなを喪葬の礼は浮屠のなみ要ぬるなるなを供なを洒水なるなるを火を乗を茶毗なるゝぬるといなるとゝ神楽歌は麻績女のさえハなを

いき志ま所のかしこ[illegible]ハ稲と上納せ所対ま
かき志ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]と女児ども[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]雑式
ま凡百姓被雇刈稲之日不得率人拾穂[illegible]ま穂を拾ふ
けしは其後の稲ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
[illegible]て毛詩大田ま彼有遺秉此有滞穂伊寡婦之利ま[illegible]又
田植謡ま八穂ま八石穂ま稔ま[illegible]ハ祝の辞也万
葉ま秋の田乃穂むきの[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
ふつれふきものを凡穂付ま穂ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
の風みて波のよ[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
なま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
葉の稲く密く[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
の雲と浪[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
稲華 富州花詞花集おむらてる倉ふ[illegible]ま
のけ[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
稉音因集
韻禾華

蕃名 ブルームハン・レイスト

此ものの麦ま花ま似[illegible]ま[illegible]ま文粹橘在列詩に阡靡稲花千畝
遠甚香かくはし歌よいも[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
なの稲田ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ま[illegible]
食ふて浅草ふものを續紀十六國言有物如灰從天而雨
畿内農稔價賤老農名此物為米華明和寅卯の歳を来范
城雨やしをんをつ

加比延喜式○即穎なり又本穎雜穎の名ありてゑくまよ
ほ穂ゑつけまぐら上へ出せ穂ゑとに上納米の事をかくいつり子五百番歌合ゑ昔ら代ハ
めゑのけとへつくる田の稻のわぎもの粧ゑまうせん
志奈比書紀○當ゑ廉の字と訓ゑ菅家の別ゑ垂とよ
志奈比ニ俗馬樂書抑のさまひ伊勢後百の花乃さまひ
ちといつとおゐ穂立稻穂の勢て接
しとえゑゑり出ふとつ
穎玉篇禾末也詩傳穎是禾穗之垂穎也晚穎是禾穗之挺
穎言其穗重而穎垂也○爾雅載穎注穫稻也是穎ハ穂の
おふて物の尖とと云脫
穎針穎ゑとえゑり

蕃名アイル

按ゑ穎ハ神代紀の芽の意ゑおれし芽ゑハ生氣の発動
と形容ゑ温溫ふして活立の意ゑて活ゑつゑ芽ゑしき
芽なきゑとの泡ゑよ原田の實穎とあきなとあり又

書紀ゑ垂穎とあるハ傾き俯の謂ゑて俗ゑ下より上の
猶て頃く我加夫久と云ふ堅穎の清ゑ菩薩實て俯く
人間實て仰くゑつゑ仰り菩薩ハ朝鮮語ゑ米の異名な
日雞林類事ゑ載て高麗方言白米曰漢菩薩粟曰田菩薩
或云今朝鮮の俗白米と白菩薩とつゑ凡穀實ゑ垂穎
垂て根ゑむりゑと人の俯して恭き形ゑ比ふなりゑ
人浮葉と得て富貴なれハ不遜ゑて必仰くとつゑ形
渭傲則仰ゑり書艸の意ゑ實ゑいゑと稻ハうゑむく人
ハ卯ゑおをくゑるゑのゑてのぐるゑ自淮南子云夫子
見禾之三變也三變始於粟粟生於苗苗成於穗也滔々然曰狐鄉丘而久我

首禾子禾穂垂而向根君子不忘本也○稲穂の出ずるに穎枯るゝ穎を吐くを実を成ざるなり俗穂枯と唱へり又黒穂とは実をなさゝずして焦るゝ字書穗禾傷雨則生黑斑也

乃義和名鈔○即芒也

波志加　稲毛東鑑ニ稲毛三郎ト云フ武蔵国稲毛村稲の最上なるを

芒音茫和名鈔引切韻禾穂芒也正字通稲之有芒刺者曰芒種周禮地官下地澤草所生種之芒種註芒種稲麥也

秒音眇説文禾芒也又曰穰芒粟也六書故五穀皆有穰

蕃名ステーケル

乃とは直也義とは物の実鋭なるを文といひ一説に支ハ利の渭剣芒の類皆是なり波志加とハ物の柔軟なる堅脆をハ唱へる其芒の物を刺をへきり為ゆゑ又稲とを麦とを書ちしとゝふを其芒の刺を毛に比して稲芒を長く短く大きゝ又有無の異あり稲芒を赤白の分ゆ数種ありて一ゝ決○穀芒を作毛ゝゝ又毛見毛止なるゝふいみしゝゝ幾毛田米毛取ふものこゝ又地より産めるものをふへて毛ともいつり植進尊盤古氏のめき身毛悉ゝ樹毛となるゝあるをふるきいひ伝なるゝ

穀梁傳凡地之所生謂之毛晏氏春秋以草木為髪藤相公辨

松竹策文野草
山木毛髮之種
稻種古事記○天智紀ニハ稻種ヲ多奈志稱ヲ訓メリ田根ヲ注シ曰藻塩炙ヲ稻久
稻種ハ穀稻ノ謂ナリ又種ハ田根ヲ注シ曰藻塩炙ヲ稻久
保トナリヲ保
ハ即穗ナリ

蕃名サート・ハン・レイスト

古事記ニ大食津姫ノ於ニ目生稻種ヲ云ヘ書紀ニハ生
稻ヲ生ヲ殺シ其ノ種ハ伊勢尾張美濃近江長門
等ノ物ト美好ヲ云フ説アリ然ルニ一國ノ中ニ多ク色気
土ニヨリ宜シカラザルモノハ稻ヲ加ヘ殖ヤシ又加殖ノ
故米ニナリシ故越米ヲ云ク粘ニ用ヒ宜シ京都
ニテ紙俵ニハ必越米ヲ用ヒ其ノ光艶ヲ出シ年ヲ経テ出ツ

ルモノ懷風藻ニ美稻ト美麻志稱ヲ訓ス万葉ニハ味稻ヲ作
リ梅ニ民部式諸國ニ貢ヲ課ス伊勢國大炊一千七十石糯三十
石尾張國大炊一千八十石糯二十石ヲ行ヒ今ハ公儲ニ為ルモノヲ
尾張美濃ヲ江ヲ取ルヲ吏　日神ノ御為ニ始テ天
田ヲ耕種ヤシメタマフ寡伊勢之狹長田ヲ云ヘ又尾張ノ
言ハ小墾ナリ是ハ熱田ハ温泉ノ名田ハ稻ヲ冠ラ
キノ名ナリ　風土記ニハ佩室臣ノ身ノ終ノ義ヲ云
フ也　荆州記云淮陽郡西北接萊陽縣有温泉其下流百
里恒資以灌溉常十二月一日種至明年三月新穀便登重
種一年三熟温泉下流ノ灌ク所亦熱田ヲ云フ相類シ

是燥土なるゝ故あり拾遺集物名よ尾張米とよめ所池
とゝりこめてこれをのおのゝ所ハぬひのくちなるをたのま
ふ女房し仮と南よ雪とゝ〳〵ゝ稲よハかぎゝざれとゝ
ゝゝゝの土宜よ相應して後実よく利益ありと簡てく
ふべきをゝ土地よりて稲田よりしく粟田豆田よよ
ゝしき所ハ田かゝ沼所ふ沼く稲とゝ沼と不利とい
ふ所し○稲よ赤米をゝ白米の雑まるハを稲
子と擺ふとゝの精しゝゝざ沼ゆ所を後撰集いゝてか
のゝしきゝをゝぬ種をゝ那ハのまてゝゝやどに植てゝ沼
所く年切とゝは播てを苗よ出ゝ沼ゝゝ凡稲稙ハ穀を持

ゝ紀英好稲種を擺をゝ所ハ田ゝなゝ稙ゝを田ゝまゝ紀生
ふるゝ及ゝゝゝは穂草赤米ゝと雑ゝ出ゝ未ぬ仍て田ゝ
ゝゝゝ時勤て時ゝ彼影彼抜ゝゝゝ田五穀の種子
とよく能し場よ堆ゝ所馬ゝゝて三ゝ五ゝ日埋ゝ種
子の上を踏ゝて平沼ゝは花おけハ出所ゝを稙ゝ播ゝ前
よ尾馬骨と煎ゝ汁をゝく浸ゝ乾ゝゝれハ蠹ゝ或ハ鼠
ゝ魚の油ゝゝゝゝゝゝ灰を揉合せ前ハ生長ハよく実
のゝよゝ○凡種子まきハ四節ゝゝふ午の時ゝゝゝ
ゝまゝ紀ゝふ土のゝゝ日よゝゝとゝゝゝゝ灰○平城紀曰
稲有早晩各任土宜而畫穎為穀種子難辨空本者收穎利

者納穀不絶本穎廻元種子本稲之外不得收穎後世百姓
貸穀とるもの多くハ年の種穀なきの富戸の困窮
を憂ひ米粮と利息を約束し秋熟する時之を償ひ
ふり富戸凶荒なれハ米穀をぶみ完と償ひ
四年ハ豐熟なれとも去年の負債を引當られて延々
次遂に窮百姓の基となるハ其黄ハもの禁制のもしなん

稲莖 古事記

和良 和名鈔

稈音筍與秆同博雅稲穰謂之稈韻會稾禾莖稉音空集韻稲稈也稈音籃稲穀穰也

穀草 農桑直說

禾稭 正字通亦謂之若

稲艸 以上綱目 粟艸

蕃名ストロー

古ハ草とも和良とゝひ る一説に和良を加良といふ説の如きなり 禾莖ハ此ハ和良久支ともいふ

和良須偖 字治拾遺

和良志偖 稈空穂空ハ空多とまで空後とまで空ゝ
のと須 稈空ハ後ゝ凡竹節の數中空なるを
ゝゝ 簡稈 須具利和良 退私録須具利ハ勝ゝ通ゝ
ゝと 稈乃袴即菩 ゝゝてゝゝゝゝゝ
ゝゝ 稈乃袴即菩

秸音戛本作稭鞂禮記註治穂去實曰鞂或作藁韻會稾去皮為秸書禹貢註刈禾半稾曰鉦半稾去皮曰秸

稭 説文昂稭心也　菩 字彙禾皮

蕃名ビン子

稻穰の用尤弘しむ屋を葺くもの也小取まつり蕃を

稻穂と二門ヨ打うけく舍ともゆ急牽ハ家居とめく

軸しうも實丹集ふいもりてどんと泳しられハ軍中ヨ

ハ旅り農耕のかりうめめぎとまるなを俗ヨ幕の紋ふ

とのハの字形しうるといもりくいてうハ稻とかうこ

解ヨやいふしく髮先富の宮屋を葺く茅葺なを平服

ハ檜皮葺なるもりて大神宮式忌詞ヨ寺のうち城屋

葺と唱つり　寺と豆羅とい　ふハ韓語なり　さくは當時ハ隠岐の地面を

度く茅の禁野を求めうぬきれと白民の居ハ稻稈をて

ぬきしかとに賤ヨ稈屋ヨといつり宗廟の尊無二とい

ふ　大神宮だと將茅茨剪ず除佛ヨりさ法誠ヨ常世の

神恵を仰ぎ　臣国柱謹按ヨひつり　先君慶長の頃ヨ対

々軍國の勢城ハ民を為る不ふて殊ヨ他邦の使者ヨ為

度家り茅りハ淳ヨ何なられ城門評ハ瓦葺ヨなきれり

しとりるものあり先君ゆて敷百年泥つる民なれバ皆

一家の内なりを為ふて門庶の富とりく必と四ふし衆を

感化ぎそくの時他邦ヨ使ヨ出れ不とり者ハ必智

急なる一一吾邦内士庶の強寇なると尺てこそ習へ

し城門の茅葺なるハ我船ヨ攻ふ滅ふ防ぎれさを

し又豊太閤秀攻来し時を三國乃兵を撃へ二ヨの険ヨ

拠て敵の兵粮を絶きるとのあるハ皆ひき戦ふことの

かるかる度きと皆一回ヨ勇ヨ出るとを先君ヨ曰いふとも

凡國ヨ君しうハ民人乃為なるハ代々数百載社稷の土

地をハ如て国の帰ヨかけさせ無辜の百姓を傷ましハ

永圖ふハ伊勢ゝ遠ゝ豊氏の和議と容られ
ら〻見留民を仁むの徳よりいでゝ金
湯の固人臣の極を茅門の百姓ゝ富貴ゝ
須聚楽千秋の亭を子ゝ七十の時ゝ孫絶もてしハさ
きわゝ国民を以城郭うて半礎の封崇峻紀ゝ積稲為
と世ゝ伊ふふハゝうざりしゝ
城ゝを稲城ゝ国ふて拔をゝ次ゝ稲ふ
く築るゝの堅して拔ゝふゝハ稲稈ふく墨壁築
きゝ佐ゝ佐ゝ伊ゝなゝ　又孫朝鮮の役吾師ゝ土俵を以て壘と築て歓迎
ゝ伊ゝ系より説と拔ち鎮て敵く拔かゝかゝもしよ
し彼方の人の記ゝもの〻ゝえゝ系いふしゝの稲城
を稲都の土俵ふて築建ゝふゝやゝいゝ　又馬牛を飼ふゝ私稈を用ふ次ゝ
席ふ織ゝ　頭宗天皇の大御奇に稲席ゝ揚と
詠ゝ万葉ゝハいゝふうしゝふゝ引ゝふゝゝ

和州栞曰つゝなゝハ藁籍をゝ方丈記ゝつゝなゝと為
て敷の床ゝすゝいつゝ束弁の義束稿を席ゝゝゝゝ
蓋素紀ゝゝわゝの束ゝゝ物を志ゝてゝあゝ孫こざ
ゝゝや俊軽奇ゝ嵐のゝたゝえぬわゝゝゝふ住たゝハ事童ゝ
志ゝ敷ゝふふのつゝなゝゝふハ十貫ゝ藁を組ゝるゝ節
とつゝめてふゝのゝいつゝ又貧薦ゝりしハ白茅ふ易
用ゝく神事の席ゝゝ説文ゝ稽禾藁去皮祭天以為席　又曼裹ゝ屩ゝ
作ゝ加ゝ稈鞋ゝゝ中拔の屩と作ゝゝハ五畝早稲
と白糠稲の稈ゝたゝあゝざれハ作りかゝこの二ハ
稈節長ゝ加ゝふゝ　本草綱目云稈嫩心取以為鞵　又埴土ゝ和て磚を塗

と塵わらといふ又苞苴ハ稈ハ性温なるを
のみして紙を製り世ハ故に牧蔵ものを是ハ裏もり
みちん帛と製し鞍と書く又筆と造る帛藁筆なり又紙
ハ造れと藁屑ハ蘇易簡紙譜云浙人以稲稈○本綱
稲稈煮治作紙其紙不可貼瘡能爛肉又云治墜馬撲傷損
用糯稈焼灰以新熟酒連糟入鹽和淋取汁淋痛愛立愈也
○凡稈の淋汁皆垢汙を洗ひ除く我中子稲稈の淋汁ハ
布を染らし紅花に用ひ絹布を染る色し沖縄の稲州元よし蓋を稲中
夏とん穫らるゆゑ米の変りハ淋汁を濃し又藁灰ハ鍛冶
ならざれらもわるふ水にけりて灰汁を濃し
なるを用う金を鍛ふらこに灰と併ふものやを回鑣と

打ふけ黄金と入くれよりは十二までとれ折角ハ金
と入るるを鑣とんて鑣の中と割る象眼ひくふらめし

瑞稲書紀

両穂古事記序ハ竝穂之瑞と云ふ是なり　両岐稲及麦ハ二股穂なり

嘉禾書周公受禾東土初作嘉禾之誥○春秋感精符日下淪於地則嘉禾興○孝経援神契德下至地則嘉禾生
○陳陰鑑嘉禾方合穎秀麥已分岐　嘉穀史記晉唐叔得嘉穀鄭玄云二苗同為一穂○説文禾嘉穀也

蕃名サーメングルウイアヒ、ハンテウヒーアイヒン

治部式曰中瑞曰嘉禾或異畝同穎或孳連數穂或一稈二
米也○天武紀七年秋九月忍海造能麿献瑞稲五莖毎莖

有枝八年八月縵造忍勝獻嘉禾異畝同穎同年十二月因幡國貢瑞稲每莖有枝九年八月法官人貢嘉禾東觀漢記光武生於濟陽縣是歳有嘉禾一莖九穂○後魏書許謙字元遜代人也子洛為雁門太守家田三生嘉禾皆異隴合穎○元史世祖至元四年大原進嘉禾一本異畝同穎○持統紀六年九月伊勢國司獻嘉禾二本○文武紀十一年九月京人大神大綱造百足家生嘉稲○嵯峨紀弘仁五年八月大和國八島寺有嘉禾一莖十八穂金五行志興定元年大社壇産嘉禾一莖十五穂○類聚國史　文徳天皇仁寿元年八月河内國獻嘉禾一莖三穂○扶桑畧記　陽成天皇元慶九年正月甲斐國獲嘉禾是より前天智紀三年十二月淡海國言坂田郡人小竹田史身之猪槽水中忽然

稲生身取而收日々致富栗太郡磐城村主殿之新婦牀席頭端一宿之間稲生而穂其翌旦埴頽而熟明日之夜更生一穂殷得始富○大倭姫世紀曰　垂仁天皇廿七年秋九月ゝ鳥の啄ゝ高ゝ鳴くゝ喧きと止て大幡主命の舍人紀麿と遣しらの多乃啄所と着やきあるゝ小罷て着ハ島國伊雜方の葦原の中ゝ稲一基ゝ有ハ一基ゝ千穂茂ゝらの稲と白きゝ名鶴くゝゆる時まらゝ鳴ゝゝと見驚てゝ多ゝらまち止きゝと及言申ゝてまゝ小倭姫命曰恐し事問ぬ多ゝ田化て皇太神ゝ献る着とと物忌始まゝく波稲と伊佐波登美神ゝて拔穂ゝ

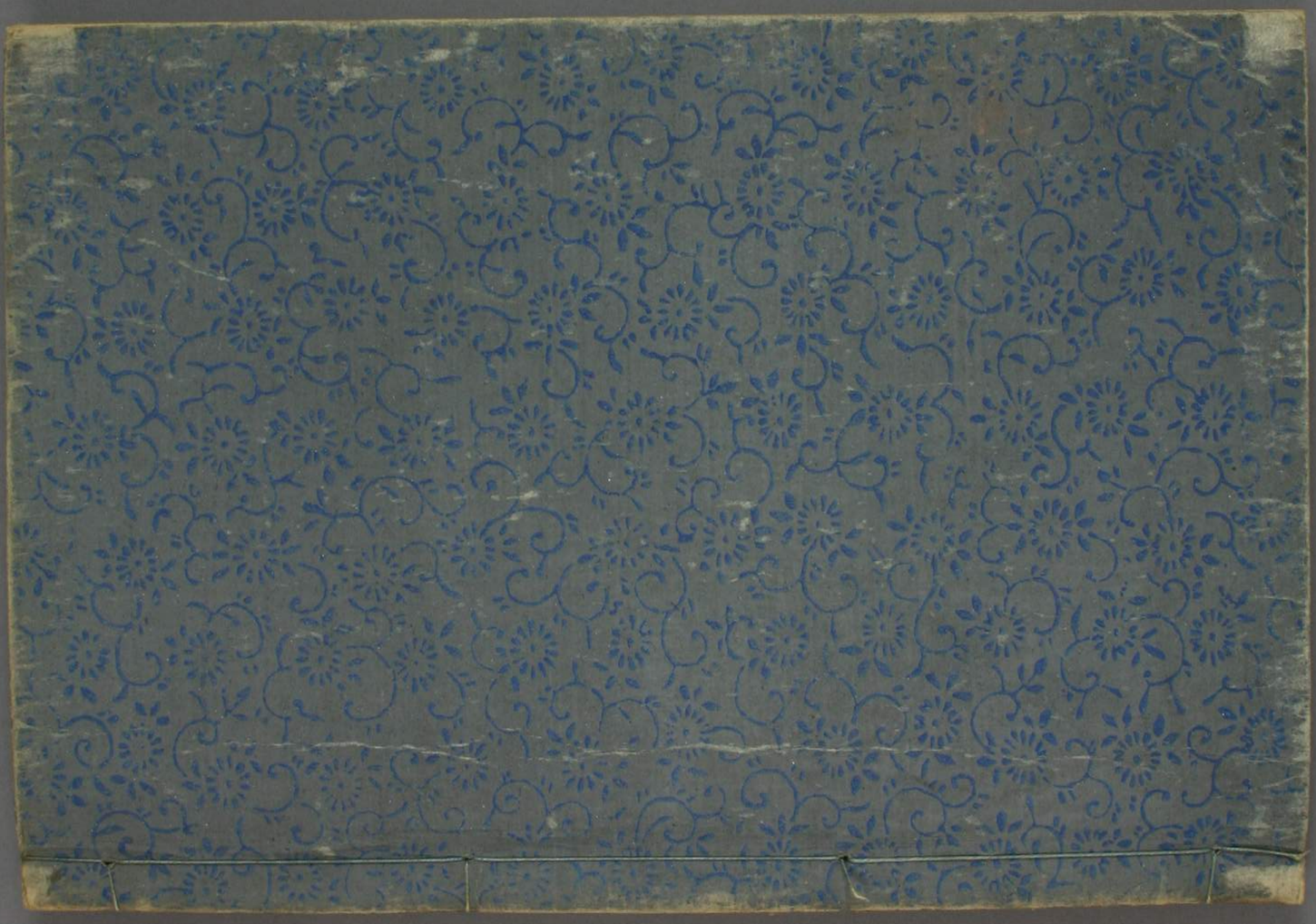
して皇太神の御前ゝ小題ゝ又ゝ稲と大幡主女乙姫ゝ清酒造ゝ奉ゝ御あへゝ奉ゝ稲生地と千田と号島と志摩也　唐書朔方節度郭子義言寧朔縣界荒地十五里有黒禾穀出遍地毎日附近百姓掃盡經宿遷生前後可得五六千石其禾圓實味甘美臣以為天啟興王先瑞百穀故漢稱兩粟周頌來麰豈若瑞禾自出家給人足益陛下富教安人務農敦本光復社稷康濟黎元之應也又云元和中東川觀察使潘孟陽上言龍州武安川中嘉禾生有麟食之復生麟之來一鹿引之羣鹿隨焉光華不可正視畫工就圖之并嘉禾一両以獻是多和漢の登記ゝ所不蓋語屋ゝゝ

そのほらん
むかしより荒歉の極にいたりては草根樹皮を喫ていのち
をたもちしためしはきかれども食は雨夜の星のごとく稀にも
稲粒あるもの糅されしハ慥にてかく菜食のこされハ
必竟寿きめ浮腫て面部黧黒色にあるものあまりして
氣力の儚手足の動もましかつ頃 前漢天文志云河平元年旱傷麥民食楡皮野客叢書云乙卯春歉甚淮人至剝楡皮以塞飢腸○野語述說曰延寶乙卯春適大歉飢殍滿道路予棲遲山市有賣樵新者其新皮多白問之則曰飢者剝以當食也其方採松樹剝皮煮之數沸然亦浸水去脂杵舂之入米少許為餅充其飢腸也其餘無名之草木無不食之也雖固塞一時飢腸終免其死十一二而已○南楚新聞云荊南孫儒之亂斗米四十千持金寶換易纔得一合一撮謂之通腸米言飢人不可食他物惟煎飲之可以稍通腸胃是人穀に非れハ生さる

の状ハ土民百姓の色度悪しきのミならず其皮膚の瘁ぬ
飢餓あし
るといふハ常に雑穀を茹て稲米を喫ざるが故なり
や因て保歳といへとも一日に稲米七抄を糧とするを
のミ法に饑莩を免ると以ふ人稲に非ざれハ亦生かたし
きや　按に東小塊吏の人も寿五十歳を以て長命と是
蝦夷けも地稲なく今よ新魚獣の肉と粟稗の根小
しそ闇より涸寒の甚きかゆゑなるされハ和蘭の如き
を適稲を甘されども果味粟にも常て只菽麦獸肉を茹
ふねにこ寿ハ四十五十歳期命となす是と云之をハ欽し
ハ人ふして稲を食ざるものハ豈只も形容のかしげる
のミにあらす頃も天年を全　夫稲は天地の和気を受て成
く繁盛と續ふとみえたり
とるかうへにも　皇國の種ハ殊にすぐれ自然の為穀に
て万國において八絶て有さるたぐひなしそのゆへに稲ハ

太陰乃精といふは春秋説題辞に栽て西土の説なり新
方乃農書にたの説に倣て稲は名をやにやすものとい
へるを訂り凡物は名次乃二字のうちそれを帯に次の
徳をもて稱するものなれハ稲とうしろも日訂りよ
おゆまりくされも実のなるもあしいきすくなきまう也ふの
こなれ涂ものなしは名年にハ飯よめかふらきくとききは
らぬ又素問云稲得天地之和高下之宜故能至完也伐取
得時故至堅也とありさいふ稲と西土のは色黒く嵩
は碎き飯に炊ても殖とらむ味ハ新方の秈にも劣まり
周て唐人の飯といふものとえに新方の湯出粥やされは唐

人の力疲弱ハ先食米の少なきがゆゑなり○凡村里の垢
汁なと流入る稲田はよし穀蔬果実ともに人の往還なと
あるものはとりわけまさかへりてみだりに生立なり
故に田土を耘るにハ第一とはいへども人の稲畦を行通ひ
しまでよくも農に在ると人気乃物を育る物理か
くのたとし但垢名埃馬通なとの常に泼き及ぶ田地た
第一の耗といふぞ深く上田にならむとするは蔵也附
の悪行ずるを易て細となんぞ或ハ川沙溝渚の容
土を運ひいれへし孝經援神契に汚泉稲に宜し淮南子
にも江水肥而宜稲とあり續世行日稲の熟なるて若かく

早とさぐり莖ざかり太早くるは実いりよわろしそ
肥のるて地の氣凝くるや時ハ田と乾しはとりて稲
の間くに竅と明て地氣と脱ぬるを宜てみまと好き流
あり新しきよみとかくれハ稲出来かたく実いりよし○
上田乃稲ハ根株おそし凡稲の細根一本にハ稈二十ば
莖とはるなりて田は三本植れを三本のまゝまて強
おくなし

成形圖說卷之十五終